

悪徳リンパで
背徳感から
オールハッピーまで
持っていく話

無口で変な男に墮とされる
彼氏持ちで一途な田舎娘(と店長)

基本CG 10枚+表紙

差分・会話パート込み 計122枚





千帆「あ……は、はいっ」

「お客様、どうぞ、中にお入りください」

千帆「よろしくお願ひします…」

店长？「はい、承ります。」

千帆「ど、どうしよう…綺麗な外觀だったし何の気なしに入っただけだよ」

千帆「すごい怪しいお店だよなこれっ」

千帆「でも、サービスで高そうな飲み物とかお菓子食べちゃったし」

千帆「今更断りにくい…」

店长？「それでは早速、問診の方から始めますね」

千帆「はい…」



店长?「あ、申し遅れました。わたくし、当店店長のコトリと申します。」

千帆「コトリ...さん?」

千帆「どう見ても子供なんだけど...」

千帆「あの、コトリさん、失礼なのですが...おいくつですか?」

コトリ「...」

コトリ「何かお悩みの方がありますでしょうか?」

千帆「えっ、あ、その...」

千帆「こんなこと施術に関係するかわからないけど...
恋人がここ数ヶ月連絡取れなくて...」

コトリ「ふむふむ、遠距離恋愛ですか?」

千帆「違います、その、ある日突然いなくなってしまって...」

コトリ「なるほど、それはつらいです...」

千帆「はい、どうしてなのかわからないし、どうすることも出来なくて...」

コトリ「んーむ...心身ともに疲弊しているご様子ですねー
まずはリラクセスできるアロマを炊きましょっか
どうぞ、そちらの施術台の方へお掛けになってください」



シュー…

部屋中にすっきりとして爽やかな香りが充滿していく…

「コトリ」どうですか、嫌な匂いじゃないですか？」

千帆「はい、いい匂いです…なんか、落ち着く…」

「コトリ」それはよかったです。

はい、そのまま呼吸を整えましょう、深呼吸して…」

千帆「すーう…」

「コトリ」はいで」

千帆「はーあ…」

「コトリ」もう一回…今度はゆっくり、すって…」

千帆「すー…」

「コトリ」はいて…」

千帆「はー…」

千帆(うわあ…すごい気持ちいい…ほーっとしてきた…)



コトリ「効果が出てきたようですね」

リラックスを通り越し、頭がぼーとして、体が熱い……

千帆「これでいいんですか？なんか、体が……」

コトリ「発汗促進して代謝を良くすることで、リラックス効果を……え、得るんです。」

千帆「コトリさん……？」

コトリ「いえ、大分効果が表れてきましたね

では、施術の方に移りますので、これをつけて仰向けで寝てください」

千帆「これ、アイマスク……？」

コトリ「視界を遮断することによって、肌に伝わる感覚をより深く感じることができんです」


千帆「な、なるほど……」……しゅぱっ

判断力が低下していて、疑問を感じることなく、言われるがままに体が動く……

ゴロン……

コトリ「お客様にあつた施術を準備しますので、そのまま横になってお待ちください」

千帆「はあ……はい……」



コトリが部屋を出てから数分後、
部屋内に備え付けてあった
スピーカーから音が発せられた

あ、あ……てすてす……
あ、お客様、準備が
出来ました

施術の方
行っていきます

え……コトリさん？
どこから……？

モニタールームです。
私は指示役で、実際の施術は
他の担当者が行いますので

……他の人？

ガチャヤ…コツ、コツ

…

…?

あ、彼には喋らない様に指示してますので

はあ…

はっ！彼!?男の人!?

大丈夫ですよ、

モニターで監視してます

そういう問題じゃないです!

あー、折角リラックス

出来ていたのに…

はい、深呼吸です

…?、すー…はー…

あ…また、

ぼーつとして…

はあ…はあ…

男性がいろいろ触りますけど

大丈夫ですよね?

…はい



ぬりゅ…ちゅぶ…

(お、オイルの音…?
何も見えないから
全然わかんないっ)

いきなりオイルを垂らすと
冷たくてびっくりしますからね
手で少し温めてからお塗します

(うっ…
な、なんか…
人が近くで黙々と
作業していると
そわそわする…)

じゅぶ…つぶ…

もう大丈夫ですかね
ではお客様、失礼します





うあ…
ふっ…

(うう…知らない
男の人に触られてるっ)

…ふっ、緊張してますね
大丈夫です、すぐ慣れますから

うう…りっくん…

思わず恋人の名前を
呟いてしまった

…。

オイルを
塗りたくっていた
手が止まる

(あ…気を使わせちゃったかな…
そっだよね、店員さんも
仕事でやってるんだもんね…)

あの、すみません…
どうぞ…続けてください

そうです…
力を抜いて…
身を任せて…

はあ…はあ…

お腹、手足、ふともも…
全身隈なくオイルまみれに
なっていく…

更に、視界を遮られた事によって
感覚が過敏になり、店員の手が触れる度、
ぞわぞわとした刺激が脳に伝達される

ふあっ…んっ…

どうですかー
気持ちいいでしょう？

あ、はっ…い…

自然と身を任せてしまっている…
こんなことしてて
いいのだろうかと思いつつも、

頭に送られてくる刺激を
振り払うことが出来ない…

う…あ…

…大体塗り終わりましたかね
それじゃ、仕上げです





水着の中
失礼しまーす

うひゃうっ！
な、何してっ！

オイルを塗るだけです
ほら、力を抜いてください

うっ...うっ...

せーな...

(うっ、敏感になってる
時にこんな...)

スリスリ！

(こ、擦れて...)

んっ...



はい、次は下ですっ

し、したっ!?
だめっ、そこはっ…

にゆる…

柔らかい肉を波立てるように
指を滑らせ、水着の下を
弄ろうとする

うっ…ん

(や、やだ、こんな!)

ふふ、もっど気持ちよくな
りましょう…っ

(駄目…逃げないっ!)



…あ

いい加減にいつ…

スッ…

ほら、早く、
アソコもぬっぷりと
いっちゃってください

…?

…。

大事なところも
丁寧に塗りましょうね

ぬっぷ…

ドカツ!

店員「……!」

残る力を振り絞り
自分の体に絡む手を
振り払った

千帆「はあ、はあ……」

千帆「や、やっぱりエッチな事するつもりだったんですねっ!」

コトリ「施術の一環ですよ?」

千帆「何が施術ですかっ、もう騙されませんからねっ!」

コトリ「……でも気持ちよかったですよ?」

千帆「……そ、そんなわけないですっ!」

コトリ「そうですか、ん……じゃあ、その太ももに滴るものは「体……?」

千帆「……っ!?どいにかくもう帰りますからっ!」

コトリ「はいはい、またどうぞー」

千帆「二度と来ないですっ!」





バタンツ…

千帆が勢いよく飛び出していった後、
コトリが何事もなかったように戻ってきた

コトリ「…逃げられちゃいましたね」

店員「…」

コトリ「大丈夫ですよ、戻ってきますから」

コトリ「ほら」
スツ

差し出した手には可愛いケースに入った携帯が握られていた

コトリ「もちろん千帆さんのです」

店員「……」
ジロツ

コトリ「…仮面してよくわからないけど、睨んでますよ」

コトリ「そもそも、貴方が手際よくエッチな流れにしないからいけないんですよ」

店員「…？」

コトリ「私の言う通りにしてれば必ず快樂墮ち雌豚にできるんです」

店員「…」 コクリツ…

コトリ「ふふっ、次は期待してますよ？」

コトリ「ふー…それにしても、」

コトリ「私が開発した催淫アロマの効果は絶大でしたね」 しゅるっ…

コトリ「…」 ジーツ…

マスクを取り、ジツと店員を見つめるコトリ

店員「…？」

コトリ「私も少しだけアロマの中にいたので」

ジリジリとコトリが近づいてくる…

コトリ「ここに寝てください…」

コトリ「施術に集中しなかつた…」

店員「…っ！」

コトリ「お仕置きです」



フフフ…貴方の、
こんなに大きくなっていますよ？
嫌々やっっているように見えても
こっちは正直なんですわね

あむっ…

…っ！

あ…今ちよつと声が出そうでした
駄目です、貴方は声を発してはいけません

…我慢です

ちゆる…んちゅ…

…っ…っ！

乳首…んっ
好きなんですわね
ちよつと意外です
じゃあ、もつと…



んっ…んっ…

…んっ…んっ…

んっ…んっ…んっ…

…んっ…んっ…

んっ…んっ…んっ…

んっ…んっ…

ちゅっ…ぽっ…

ふっ…舌が疲れますね

それじゃ、ごっちも…

ギョツ…

…っ

ふふ…

直ぐに出しちゃ
駄目ですよっ。



うんうんうん...

ちゅんちゅん...

ん...

ピクンピクンしています

早く出した方がいい

敵のいるそばにはね

でも、まだまだ、

お仕置が必要ですからね

ちゅんちゅん...

なでなでだけです♪

.....っ

ちゅっ...んっむ...

さす、さす...

ん ぞん

んぞん



ガタツ…ガタツ！

んむうつ！

ちゅぼっ

ん…そんなに
辛いですか？

…コクッ

はあ…全く、
しよーがない人です…

千帆さんがまた来たら
今度はおつと雌の顔に
させるんですよ？

……コク

よろしい

じゃあ、激しく…



ちゅーっ、れろれろ

ガタン…ガタン…

ムンムンムンムン

はあ、はあ…

すっ、すっ、すっ、すっ…

頑張っ

我慢してたんですね

えらいですっ

ソクソクっ…

ん、ん、ん、ん、ん、ん

…っ

ちゅーっ、れろれろ

ソクッ!

ご褒美です

さっきの中途半端な施術で

お預け喰らった分も

シクシクシク…ッ

全部…出してくださいっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

ドッ

ドッ

びくっ



ドクッッ！

わわっ！

ドクッ…ドクッ…

わー脈打ってるのが
手に伝わるてきます

ふふ、回元緩んで
気持ちよくなりますね

ズン

ピュンッ

ズン

もっどです
もっどだして
いいですよ
ギョ…ギョ…
らっせ、らっせ、らっせ



びゅんびゅんびゅん

おんおんおんおんおんおんおん

おんおん

おんおん

おんおんおんおんおんおんおん

びゅん

びゅん

びゅん
びゅん

全部残さず
出してくださいね

んっば...ちゅこっ

ドクンッ...

ちゅ...

はあ...

はあ...



んんん...

もー...

手がぐとぐとです
どんだけ出すんですか

.....

ふー...

フキフキ...

次は千帆さん体を
これで汚すんですよ？

...っ！

それじゃ、

私は今日の収穫を
記録に残さないといけないので

...コクッ

...ふっ、またあした。

「コトリ」おはようございます、さあ今日も張り切つていきましょー」

「店員」…」

「昨日の事は何事もなかったようにいつもの対応をする」コトリ

「コトリ」なんですか、じつと見て」

「コトリ」はあ、そーゆういやらしい視線はお客様に向けてください」

「店員」…」

「コトリ」そろそろ開店です、しっかりしてください」

「コトリ」既に一名様、店前にてお待ちになってますから」





ガチャッ!

開店時間となった途端ドタバタと入室してくるお客様

コトリ「はい、おはようございます、「名様入店です」

千帆「お、お客じゃないですっ!携帯取りに来ただけです!」

コトリの思惑通り、携帯を取り来たという千帆

コトリ「はい、おつちよこちよいな人です」

千帆「いーから携帯返してっ!」

千帆「あーもっつ!彼から連絡来てたらどうしようっ!」

コトリ「はあ…どうせ来てませんよ」

千帆「ひゃっほっ!」

コトリ「そうだ、施術を受けてくれたら返します」

千帆「な、なんですかそれ!!嫌ですよ!!」

千帆「どうせまたエッチな事するんでしょ!!絶対嫌です!!」

コトリ「んー嫌ですかー...じゃあ仕方ありませんね」

コトリ「...」

千帆「...?」

コトリ「返しません!」 ひょいっ

千帆「あっ!!」

コトリ「いいじゃないですか一回くらい、誰も見てませんし言いませんよ?」

千帆「む...」

コトリ「盛んな頃に体を持って余して、いろいろ溜まってるでしょ?」

千帆「う...でも」



コトリ「これはマッサージですっ、不貞を働くわけではありませんっ!!」

千帆「う、うーん!!」チラッ

店員「…?」

コトリ「…やっぱりちよつと興味ありますよね?」

千帆「っ、そんなこと!!」

千帆「……」

千帆「ぜ、絶対に誰にも言いませんね!」

コトリ「もちろんっ」

千帆「携帯返してもらうためですからねっ!!」

コトリ「はい、わかっています!!」

千帆「じゃ、じゃあ…お願いします…!」

コトリ「はい」「ニヤッ

店員「……」シトッ





モニター準備完了…
あれ、なんでパンツ
履いてるんですか？

こ、コトリさんっ！
なんでいきなり
裸なんですかつ！

まあまあ、
人肌で体温を分け合う事で
リラックス効果が…とか
そんなんです

うっ…

ほら、もっとくっつきましょう



ぎゅ…

あ…

苦しくないように
ギリギリの力加減で
抱きしめられる

えど…

ふふ、

満更でも
ないんですかね？

そ、そんなわけではないですっ！

…

無機質な存在感だからか
何故か拒む気もしない…
不思議な感覚

(なんだろうこの人…)



…んっ!

おー、いいですよ
今の声、えっちです

なに言つて…
んんっ!


パンツの上から
優しく撫でられる

異常な状況で
まともな判断がつかない中、
性的欲求だけが
素直に反応してしまう

まっつて、店員さん

そんな…く、うっ

あーそれです!
その調子です!



暫くの間
下着の上から攻められ、
徐々に呼吸も荒くなる

はあ…んっ…んん

千帆さん、大分
解れてきましたね

ふああ…んう…

ふふっ

もう反抗する気も
無いみたいです

はあ…はあ、あ

店員君…

…コクっ



しゆる…

あ…

無抵抗のまま
下着を剥ぎ取られる

…っ!

恋人以外に触られ
潤わせてしまった
下半身を見て
動揺する千帆…

あ、あ…

さあ店員君、
ラストスパートです♪

あ、まっ…

≡PNo…>



んんっん、んっ

直接激しく擦られ、
快感が脳を支配する

千帆さん、
イキたいですか？

…っ！
んっ、あっ… コク…

駄目だとわかってるが
逆らうことが出来ず、
素直に頷いてしまっ

はい♪
ふふっ、では店員君♪

(りっくん…ごめんっ！)

ん、んうっ！

(イクッ、イクッ)

ぴちゅ

ぴちゅ

あっ

んっ



あああああああつー！
だめええええつ！

我慢の蓋が吹き飛び
久しぶりの絶頂感を
味わう千帆

あつ、あつ、あ...

体験したことのない快感に
激しく腰を震わせ
大量の痴液が噴き出る

うわーすごい
イキっぷりです

うう、やだ、やだ...

.....

う、あ...ん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん



…ちよつと
やりすぎましたかね？

はあ…はあ…

ふー、まあでも
いい画が撮れました、

……っ

…ん？
店員君？

くぐっ

…てんいん、さん
なんか、あたってます

あー、なるほど

まあこんだけエロい姿
見たらそうなりますよね

… スツ

そつと千帆を横に寝かせる

もう止りませんね

千帆さん、覚悟を
決めてください

え…？

ビク

ビク

お互い全裸になり
密着する二人

あっ…

太ももの肉を
かき分けて
熱く脈打つものが
擦りつけられる

ど

え、あれ…?
挿入れちゃったんですか?

…っ！ プンブン

店員がカヌラに
向かい首を振る

はあ…はあ…

てんいんさん…
絶っ対挿入ちゃ
駄目ですからね…

荒い呼吸で
辛うじて残ってる
抵抗の意志を
見せる千帆

… コク

んっ…んっ…

愛液が潤滑油となって
ぬるぬるとしたストロークで
擦りつけられる

…モニターから見てると
セックスしてるようにしか
見えませんか

し、してませんっ！

あっ…んっ

絶頂を迎えたばかりで
敏感な所を食い込むように
滑らされて声が漏れてしまう

ズキュー

あゝ

ん

というか

愛液まみれの
男性器を抜き差し
してるって

それはもう実質
セックスですよ！

千帆さん
セックスしてます！

してない…
…あっ、ん

強情な…

店員君！

わからせて
あげなさい！

あぁっ…んっ!
だめ、そんな激しくっ…

……っ

一心不乱に腰を
打ち付ける店員

んっ、んっっ!

パンツ、パンツ

ピストン運動で
はじけた空気が
大きく音を放っている

あ…うっ!

パッパッ

パッパッ

んっ

はっ、んっ

すっ

んっ

じゅわん

すっすっいですっ
いいですよ
二人ともっ!

こんなエッチな画を
撮れるとは…

パンツ、パンツ

…はっ、はっ、

……っ…

どっちも
エッチに夢中
ですか…

蚊帳の外です…

はあ、はあ、はあっ

カメラが覗く部屋の中、互いに汗だくの状態で荒く息を切らせる声と肉のぶつかる生々しい音が響き渡っている

…っ！ ギョウ

…んっ！

店員が千帆の体を強く抱きしめる

…限界みたいです

…？

千帆さん、出されちゃいますよ？

店員君の精液 千帆さんの太ももの中にいつばい出されちゃいますよ？

おっ！

…！！

…っ、…っ

店員君、辛そうですイカせてあげてください

……

…「クン

枕に突っ伏しながら小さく頷く

…っ！！

ーバッ

ズン

はー

はー

はっ

はっ

んっ……

んっ!!

太ももの隙間から
精液が
勢いよく溢れ出す

…っ、…っ

…んっ!!

大きく脈打つたび、
股の間、太ももに
熱いものが
じわじわと広がって
いくのを感じる…

ズヤッ

グッ

びゅん

はあ…はあ…
てんいんさん…
まだ…なの？

ぐん

射精が中々
収まらず、性を
千帆の股に強く
押し付ける

あ…ん…
だめ、
はいちぢぢ…

グッ

あ

ほ

はあ…
はー…

……
射精が落ち着き
大量の精液が
太ももに垂れる

うーん…
完全に事後ですね

…挿入て、ませんからね？

はいはい、
素股ですセーフです

…むう

ドクッ

ドクッ

なでなで…

えう…あ…ドキッ

優しい手つきで
頭を撫でられる

……

(ちんぽう達うー)
(ドキドキなんて)
(してないっ！)

…… なでなで

……

……

なで

なで

べとべとになった体を拭き取り、着替えを済ませると
お互い顔を合わせない気まずい沈黙が続いていた

ガチャ

千帆「うわっ」

コトリ「…ふふふ、どうでした、結構気が晴れたのでは？」

千帆「…もやもやが増えましたよ」

千帆「こんなことしちゃって…もうっつくんに顔合わせられないっ」

コトリ「はあ…まだそんなこと言ってるんですか」

千帆「え？」

コトリ「そんな何ヶ月も彼女をほっとくような男よりもっといい人がいますよきつと」

千帆「いい人…」 チラッ

店員「……」

コトリ「…ね？」



千帆「べ、べ、別に好きになっただけじゃないですからねっ！」

千帆「勘違いしないでくださいっ！」

コトリ「別に店員君のこと言っただけじゃないですけど」「ニヤッ

千帆「くっくっ」

コトリ「はいはい、千帆さんは彼氏一筋ですもんね、わかってますとも」

千帆「んぐっ」

数分前の行為を思い出し、口もる千帆

千帆「くっ…帰りますっ！」

コトリ「はい、またどうぞー」



不機嫌そうに部屋から出ていった千帆

コトリ「ふんふん〜」

その一方、珍しく鼻歌交じりで上機嫌そうなコトリ

コトリ「やれば出来るじゃないですか、さっきのはかなりエッチかったですよ」

店員「……」

コトリ「次は…わかってますよね？」

店員「……」 ドキッ

コトリ「…ふふ、期待してますよ」 ガチャ

去り際に不敵な笑みを浮かべ、部屋を後にした…



次の日…

引き寄せられるかのようにまたこの場所に来てしまう

恋人が居なくなつて空いた穴を、すっぽりと埋めてくれるこの空間を
無意識に求めているのだろうか…

ガチャ

千帆「あれ…誰もいない…」



……
物音ひとつ聞こえて来ず、静まり返っている室内

千帆(な、なんか恥ずかしい…?)

自分だけ気持ちが先走つて来てしまったみたいで落ち着かない千帆

千帆「……」

ここで待っていても、そわそわと落ち着かないため、
先に着替えを済ませようと、更衣室へ向かった



シャツ！
更衣室に誰かが
侵入してくる

店員さんっ!?

な、なんですかっ!
まだ着替えてませんよっ!

.....

別にもう
逃げませんから
ちゃんと部屋で
待っててください!

... っへん
そんなにな
くっつかないよ...

んっ

ポロン!

きゃあああ!

なんでもう
おつきく
してらんですかーっ!

んんん。

ポロッ

…… チョンチョン

店員が
口を指す
シエスチャーを見せる

え……餅めさつて……

…… コクコクッ!

狭いスペースで
小刻みな水音が響く

んっ、んっ、んっ

っ…っ…っ！ ピクッ

ちゅっ、んぶっ

…っ ソクソクッ

(あ、店員さん…)

ぶ…

んっ

んっ、んっ

ちゅっ

んっ、んっ

んっ、んっ

んっ、んっ

んっ、んっ

んっ、んっ

…んっ、んっ、んっ

んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ

…ピクピクッ…

んんーっ!!

絶頂を迎え、大量の精液が
千帆の回内を埋め尽くす

んっ、んっっ!

ブラッ!

口では受け止めきれずに
精液が外へと溢れ出る

んん

びゅ

びゅる

んっふ

射精を続ける男性器を
吸い上げるように口で覆う

……っ!! ピクッ!

ガッ





んぐっ…んー

店員さんのせーえき…

ちゅるっ…

この前もすぐがったけど
今日もいっぱい出ますね…

…ピクッ、ピクッ

ちゅっ

びゅっ

んぐんぐ

びゅっ

はあ…はあ…

私、もう言い訳
できないですね…

店員さんと、
しちゃいました

……



……なでなで

……うー

ドキッ

あ……その……

それ、好きなんですけど……
わかるんですか……？

……なでなで♪

ふあ……てんいんさん……

アハハ

アハハ

……あ、早く戻らないと
コトリさんがっ

ガサ、ゴソッ

……シャツ

汚れたものを拭き取り
証拠隠滅してから
急いで更衣室をあとにした

コトリ「遅かったですね」

千帆「え、えっどっ」

目に見えて動揺している千帆

コトリ「…？」

千帆「な、なんでもありませんっ!!」

千帆「別に店員さんとなにかしたとかじゃありませんからっ!!」

コトリ「む」

コトリ「…」じっ

店員「…」ギクッ

コトリ「ふーん、そうですか」

コトリ「まーいいです、仲良くなってもらえたなら本望ですし」

千帆「本望…？」



コトリ「さて、じゃあ今日はもっと落ち着いた場所ですてみましょう」

千帆「**落ち着いた場所?**」

コトリ「別室です、ふかふかなベッドしかないシンプルな部屋です」

千帆「**そ、それ施術でもないんじや...**」

コトリ「もう千帆さんには施術よりそっちの方が必要だと思つたので」

千帆「**!**」ドキッ

コトリ「ちなみに使う予定がなかった部屋なのでモニタリングもしてません」

千帆「**.....**」

コトリ「ふあ〜っ...私は最近徹夜続きで眠いので自室で寝ます...」

ガチャ

コトリ「ゆっく〜...」

...バタン



別室に移動した二人

千帆「…」

店員「…」

暫く沈黙した後、千帆が顔を赤らめながら口を開く

千帆「店員さん…」

店員「…？」

千帆「ゴム、ありますか？」

店員「!!」 …サッ

千帆「…やっぱり持ってた」

店員「…っ!」

…ペリッ

コンドームを手に取り、袋から取り出す千帆

千帆「…つけてあげます」

ズボンを脱がせ、既に勃起したペニスにゴムを装着させる

千帆「…店員さん、さっきの続きしよ？」





千帆が一糸まとわぬ姿で
ベッドへと誘う

その…
内緒、ですからね？

二人だけの秘密ですよ

……っ
ドキッ

ドキ



ふふっ

さあどうぞ
店員さん

…きてください





ズブツ!

はぁあうう!!

ソクッ

あっ、ん、すこ

えつちするの

ひさしぶりだから

おなかの中

ぞくぞくすめい

ずぶ

キヤん

キヤん

ひゅ

はぁ、あつ、
きもちいい

店員さんの
おち○ちん
きもちいい

あつ

あつ



ズブズブズブ
ぬるる

あつ、んっ
てんいんさんっ
はげしいっ

んっ、おくまで
きて、すっごいっ

……ッ グニョッ

あんっ、それっ
そこすぎなんですっ

もっとしてくださいっ

はあッ

おんッ

ふあああっ♡

きもちいい♡
ばっかりい♡

はあ、んあっ♡
てんいんさんっ♡

ぬるる

ぱん

ズブ



ズブズブツ

……ッ!

はっ、ん、はっ
はあーっ、んっ♡

激しいセックスが続き
お互いに限界が近づく

ああ、もっ
だめっ、い、くっ

……ッ …ッ …ッ
ビクビクッ

ズブ

ズブズブ

ズブ

ズブ

ズブズブ

ズブ

てんいんさんも……?
ああっん、はあっ

いっしょっ
いっしょがいいですっ

んっ、いっしょっ、いっしょっ♡
てんいんさんっ♡

ズブ

ズブ

ズブ



ふー、はーっ…
すごい量…
こんなに、私の中で…

だ、大丈夫ですよね…?
漏れたりしませんよね?

… コクッ

はあ、はあ…

私、はじめて
彼以外とエッチ
しちゃいました…

はあ…

ズクッ

たろっ

んん

なんか不思議な
感覚です…
彼とすると
同じくらい、
安心するというか…

むお…

…



あっ…

…?

あ、その…
もうちよつと
くっついていたい…です

はあ

びん

おわ

…
コクッ

…?
で、店員さんは
二番目ですっ
二番目なんですっ!
一番は
彼なんですからねっ!

店員さんは…
…二ツ
…あつ!
か、勘違い
しないでくださいっ!

んん

んん

それから暫くして…

ガチャ

「トトリ」ふあー…おはようございます」

千帆「お、おはようございます」

店員「…」

「トトリ」…」

「トトリ」ちゃんとゴムつけましたか？」

千帆「なっ！つけましたっ…あ、」

店員「…」 ガク…

「トトリ」ふっふっふ…」 ニヤニヤ

千帆「あ、あ…」

「トトリ」千帆さん、いい顔してます」

千帆「…え？」

「トトリ」最初にここを訪れた時よりずっとやわらかでいい顔です」

千帆「そ、そうですか…？」



コトリ「ふっ、マッサージ師冥利に尽きますね」

千帆「マッサージ…だったのかな…？」

コトリ「まあまあ、深くは考えずに」

コトリ「楽になっただでしょうか？」

千帆「まあ…そうですね」
ドキッ

店員「…」
なでなで

千帆「ふぁ〜…」

コトリ「んー、よく見た光景…」

千帆「…？」
チラッ

コトリ「いいえ、なんでもありません」



千帆「ほあー！」

コトリ「で、店員君、そろそろ…」

店員「…」 パッ

千帆「あつ…！」

コトリ「明日の仕込みがありますので今日はもう店じまいです」

千帆「うーん…！」

コトリ「また来てくれたらいつでもできますから」

千帆「…はい」

コトリ「では、また明日」

千帆「またあしたー！」

…ボタン



コトリ「……」

店員「……」

コトリ「すっかりラブラブですね……」

コトリ「そんなに気持ちよかったですか？」

店員「……」 コクッ

コトリ「むっ……」

コトリ「……すらい」

店員「……？」

コトリ「……そこに直ってください」



裾を上げ、露わになった生尻でペニスを挟み
どこからか取り出したローションでべっとり絡ませる

……

なんですか、セックスするとも思ってたんですか？
そう簡単に私の処女はあげませんよ

！

はあ、何を驚いてるんですか……
長年一緒にいて一体何を見ていたんですかね
伊達に引き籠ってませんか？

……

ホッ

……

むー

とにかくっ

セックスだけが
気持ちいいことじゃないって
証明してあげます！



んっ…どう？
気持ちいいでしょう？

… コクツ

ふーん、
私は別に気持ちよくないですけどね

…

は…
そんながっかりしないでください
ただの照れ隠しです…

ヌプッ

わい

んっ…しよ…

おなかも減ってるので
さっさと終わらせませう





…っ！ ググッ

今、腰が浮きましたよ？

そんなに気持ちいいんですか？

…ツツ！ グッ

パチュン

ぬる、

グッ

これ…

すごいエッチな音がします…

それに、腰を振ってる感じが

その…

ちよっといいかもです

… ニヤニヤ

むっ、

調子に乗らないでくださいっ

ツ…ツ！ ガクツ

ふふっ、
あまりの気持ちよさに
体が震えてきましたね

そうです
それでいいんです

貴方はそのまま
私に屈服してればいいんですっ

パ…パ…ズ…ズ…

ハ…ハ…

ズ…ズ…

さあトドメですっ
もっとお尻を
大きく振って…

ググツ

…っ！

ツルツ

ア…ア





ストリィ

んぎいんうっ!!

…ツ!!

あ、あ…

お尻に…
はいっちゃ…たっ…

あっ

う…

ぐんぐんじい…

は、はやくぬいで…

…ツ
ツツツツツ

…てんいんくん?



パ
ン

ズ
ル
ユ

あつ、うっ

ま、まって

うごかないでっ!

ハア、ハア

んっ、んっ!!

ウツ

はっ!

だ、だめっ
だしちやだめですっ!

ズ
ル
ユ

フ
ッ

パ
ン

コトリ「ドン引きです…」

店員「…」！

コトリ「身内に犯罪者が出ました、一族の面汚しです」

店員「…」 フンフンッ

コトリ「何が違うんですか、可愛い従妹に中出ししたんですよ」

コトリ「それも合意もなしに…」

店員「…」

コトリ「お尻だからセーフ？」

コトリ「前も後ろも関係ありません、セックスはセックスです」

店員「…」 ドヨーン…

コトリ「はー、全く、しょうがない人です…」



コトリ「誠意があるなら私にもっとヒロイナイを見せるてください」

コトリ「私の創作意欲を刺激させる濃厚なのをつ」

コトリ「あ、それと夕飯は高級レトルトカレーがいいです」

店員「……」

コトリ「それじゃ、その……」 モソモソ

店員「……？」

コトリ「と、トイレ……」

コトリ「お尻に、あんなに大量に出すから……」

店員「……！」

ガチャ

コトリ「……」

コトリ「……ばか」

店員「……っ」

パタンツッ！



千帆「あ、朝からお風呂ですか」

コトリ「はい、まあ後処理が楽なので」 バサッ

千帆「え、コトリさんも入るんですか？」 しゆる…

コトリ「私もうろろと疲れを溜めてますから」

コトリ「当然のようにいる店員君には触れないですね」

店員「……」 ドキドキ

千帆「あれだけやったらもう気にしません」

店員「……」 ショボン…

千帆「そういえば…」

コトリ・店員「？」

千帆「二人ともお風呂の時もマスクつけてるんですか？」

店員「！」

コトリ「！」

コトリ「…これしての方が怪しいマッサージ師感が出るでしょう？」

千帆「み、見た目だけですかつ！」

コトリ「見た目も雰囲気を出すのには重要なことです」

店員「……」



千帆「んー…」 ジッ

店員「…」

千帆「店員さん、それ取ってください」 スツ

店員「！」

コトリ「駄目です」 バシッ

千帆「な、なんでっ？」

コトリ「駄目のものは駄目です、諦めてください」

千帆「むーっ」

コトリ「はあ、じゃあ条件を出しましょうっ」

店員「！」

千帆「条件…なんですか？」



コトリ「勝負です、店員君と千帆さん、どちらが先にイクか」

千帆「えっ」

コトリ「店員君を先にイカせることが出来れば千帆さんの勝ちです」

千帆「ぐぬっ…またエッチ…」

コトリ「二回も二回もたいして変わりませんよ、さあどうします？」

千帆「…むーっ」

コトリ「なんならもう一声っ、二泊三日温泉旅行ペア券を付けます！」

千帆「!!」

千帆「わ、わかりましたっ、受けて立ちますっ」

千帆「約束は守ってくださいねっ」 チラッ

コトリ「もちろん：勝てればですけど」 ニヤリ

店員「…」 :ハア





ハア…ハア…ッ

ガシッ

あ、待って！
だめっ、ゴムつけてっ！

…ッ

ずん

ああっ！

…ハア、ハア

駄目って
言ったのに…！



うっ、うっんっ

…ッ、…ッ!

あんっ、くっっ

いきなり
激しいですね

店員君の
本気セックスです

んんっ

チンパン

パッ
ッ

パッ
ッ

チンパン

ほり千帆さん、
やられっぱなし
じゃなくて

店員君の理性を
刺激しないと

あっ、あっしげきっ

直ぐに
出たくなるような
正しい姿を見せるんです!

はあ、はあっ…

そんなじつ
いわれてもっ

あっ、あっ♡

ハア、ハアツ

ほら、今千帆さんの中に
店員君の我慢汁がドバドバでてますよ？

完全な射精じゃないですけど
既に精子がちよびつと流れてるかもしれません

えっ、そんなっ…あぁう♡

これはもう手遅れです、
開き直りまじようよ



うあ…
(りっくん…)

…ん♡

てんいん…さんっ

…ん♡

…ん♡

ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン

中に出してっ!
てんいんさんの精液
私の一番奥にくださいっ!!

…っ!?

ふふ、素直になりましたね、
でもいいんですか?
赤ちゃんできちゃうかも知れませんか?

赤ちゃんっ…あっ♡
んっ、あんっ♡

いいですっ、赤ちゃんできてもいいからあ!

ああっ、すきいっ♡
いちばんすきいっ♡
てんいんさんっ♡





びんぎょー

びんぎょー

びんぎょー

ーッ!!

びんぎょー!!

びんぎょー

あつ、はでめいじ♡
私の赤ちゃんの部屋に
てんいんさんのせいしでめいじ♡



びんぎょー
いいですよ千帆さん!
店員君の女であることを
もっと感じてくださいっ♡

はあっ...はあ...

りっくんごめんっ♡

...ッ
ソクッ

私もうてんいんさんの事
しか考えられないよおっ♡

はあ...はあ...

すごい...
精液がドバドバ溢れています！

ドクツ...ドクツ...

千帆さんの子宮、
もう店員君の精子で
たぶたぶですよ

ほんとに出来ちゃうかも
知れませんが、お二人の赤ちゃん

ふっ...ふっ...

店員さんと、私の...赤ちゃん

ハア...ハア...

あの、その...
ごめんなさい、やりすぎました

まさか本当に中出しさせちゃうとは
思ってたなかったので...



チャプン…

汁まみれの体を流し、湯舟に浸かる

コトリ「とりあえず、勝負は千帆さんの勝ちですね」

千帆「…ふふ」

コトリ「千帆さん？」

千帆「じゃあ、約束通り…」 スツ

素顔を見ようと、マスクに手をかけゆっくりと下ろそうとする

店員「…」 ドツ、ドツ…

コトリ「…」

千帆「あ、その前に…」 パツ

店員「…？」

千帆「ちよつとそのまま、こっち見ててください」 チャプン…





ちゅっ

店員「……」

千帆「んっ…ちゅ、ちゅっ、ちゅば…」

千帆「ぷは…私の気持ちです」

千帆「店員さんはどうですか、私の事ちゃんと好きですか？」

店員「……」コク

千帆「良かった」

千帆「じゃあ…マスク、外しますね？」 スッ…

店員「……」 ドツ、ドツ、ドツ、ドツ

ス…

店員「!!」 バッ

コトリ「あ」

千帆「あ、いっしょ」

ガチャンツ!

コトリ「逃げましたね」

千帆「はあ…全くだ…」

コトリ「追っかけなくていいんですか？」

千帆「いーよー、別に」

コトリ「…?」

千帆「ふふふー!」

コトリ「なんですか薄気味悪い…」



千帆「ふふ、モヤモヤが全部スッキリしたので！」

コトリ「そ、そうですか…」

コトリ「それにしても、エッチはしても、彼氏二筋の姿勢は崩さなと思ったのですが…」

コトリ「千帆さんって意外と貞操観念ない方なんですかね」

千帆「まさかつ！」

千帆「店員さんとりつくくん二筋ですつ！」

コトリ「堂々と二股宣言ですか、悪い女です」

千帆「どつちも好きなのは事実ですから」

千帆「あんまり考えこまないことにしました」

コトリ「ふーん…まあ、千帆さんらしいですね」



気分が晴れて、浮足立った千帆を見送り、
静かになった部屋で二人物思いにふけるコトリ

コトシ...

コトリ(ふー...二人のおかげで無事新刊の原稿を描き終えることが出来ました...)

コトリ(...)

コトリ(千帆さん、幸せそうだったな...)

コトリ(私も、あんな風に素直に生きられたら...)

コトリ(もっど...)

コトリ(お兄ちゃん...)



千帆「ふーんふーん♪」

千帆(今日も朝から店員さんといっぱい!)

千帆「ふふふ」

千帆「あれ?」

ギシッ…ギシッ…

施術室の扉の向こうから軋む様な物音が聞こえてくる

千帆「…」 サツ

扉に張り付き耳を澄ます千帆

「…あ、そこ…いい」

「て…いんくん…?」

中から聞こえるのは吐息交じりの聞きなれた女性の声だった

千帆「なっ…なっ…!」



ガチャンツ

部屋に入ると、
コトリが
一糸まとわぬ姿で
店員の顔に跨っていた。

なにやってるんですかーっ!!

見てわかりませんか、
顔面騎乗です…あつ、う

そういう事じゃなくて！
て、店員さんは私のですよっ！

そうですよねっ、店員さんっ

フガ、フガッ…

んうっ…はあ、はあ

千帆さん、独り占めはよくないですよ

…え？



店員君が千帆さんのものになったら
私は置いてけぼりですか!?

はあ、はあ...

わ、わたしだつて...
この人が必要なんですっ!

はあ...うく

急になくなったら
困るんですっ!

...なんですか?

フツッ!フツッ!

コトりの下半身に埋もれた状態で
必死にコトりの顔を指さす店員

...顔?





!

どうしてまじよう...

マスクを
取ったままでした...

...う、うすうすちゃん？

りっくんの従妹の...？

...

...

じゃ、じゃあやっぱり
店員さんは...!!

...アアアアアアアアアア

知りません、

私はこの店長のコトリです

そして下にいるのは
寡黙な変態男の店員君です

さ、流石にもう

誤魔化されないよう!!

フッ

フ
...
フ

フ
...
フ



とにかく
簡単には渡しま...

ひゃうっ！

ま、待ってくださいっ
急には...んうっ

...フツ、んむっ

はあ、あっ...

ぎ、気持ちいい、ですっ、店員君っ

うず...あ
こ、ヨトリちゃん...

負けませんよ
千帆さん、

私だって...あっ

ああっ

んーっ

クモ

んーっ



ちゅるちゅる...ちゅ

あああ、そんな
激しくしたらっ...

じゅるるっ

ひああんっ

あ、あのヨドリちゃんがあんな表情...

(そんなに気持ちいいんだ...)

ああああ、だめえ

なんかっ、きますっ

...きちやいますっ

ちゅる

ちゅる

ちゅる

ちゅる



ほっ！

ガタッ

だ、だめですっ！
止めてくださいっ

……っ

で、でちゃ……っ

…な、何が

ちゅるるんちゅっ

あつ、だめっ
我慢できな……い

ぶるるるっ

あ、あ、あ……っ
ピクッ

!!
!!

ちゅるる

キッ

ちゅる

ちゅる

ちゅる



ふあああああああつ!!

フンヤアツ!!

ズ
ズ
ズ

ふはほほほほほつ!!

うあああつ!

ごめんなさい

ごめんなさい

おしっこ
とまんないつ!!

ゴクッ

あまりの扇情的な痴態に
生唾を飲む千帆

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



ちよるちよる

はーはー♡

きもちよかつた！

ドキッ、ドキッ

……んぐびぢぢ

ドキ

はっ

苦しいですよねっ
ごめんなさい、
すぐにどいて綺麗にしますっ

ガクッ

あっ…

立ち上がるとしても、既に力尽き、
その場で体勢が崩してしまう

ご、ごア、ぢぢぢ

はー↓

ドキッ

びん

びん

びん

びん

びん

びん

びん

失禁絶頂で力尽きたコトリと窒息寸前だった店員がシャワーを浴びている間、千帆はテキパキと部屋の掃除をこなし、二人が戻ってきたころには大惨事だったベッドが綺麗さっぱり整っている状態になっていた

店員「……」

千帆の前にひれ伏し、土下座で誠意を見せる店員

コトリ「……」

千帆「それで、これは一体どうしたことだったのかな？」

流石に超天然娘の千帆でもこれ以上騙すことは出来ない

しかし、事をありのまま伝えて納得してもらえるかというところかなり厳しい……正直、最悪の展開も覚悟しなければならないだろう

店員「……」

コトリ「……」

この期に及んで何か起死回生の言い訳が出来ないか模索する二人……





千帆「むー！」

コトリ「その…」

千帆の圧を受ける中、コトリが口を開く

コトリ「創作活動のネタ肥やし……で」

千帆「……」

コトリ「流されてエッチな事をされちゃう女性を実際に見たくて……」

千帆「……？」

コトリ「それでああ、ちよūdい人が身近にいたので……その、」

千帆「んなっ」

千帆「わ、私そんなチヨロくないっ！」

コトリ「……」

店員「……」

千帆「ええっ、りっくんまでっ!？」

働いた悪事を洗いざらいはくと、千帆は大きいため息をついたあと、許してあげると言って表情を和らげた

千帆「全く、これつきりにしてね？」

店員・コトリ「…はい」

あんなことされたのにこんな笑顔を返してくれるとは女神過ぎて本当に頭が上がりません

千帆「りっくん」

店員「…千帆」

じ…

千帆「ふふっ」

マスクを剥がし、ようやく会えた恋人の素顔をじっくりと堪能する千帆

コトリ「…」ズキッ

コトリ「千帆さん」

千帆「…うん？」

コトリ「この3ヶ月ぐらいの間、どうでした？お兄ちゃんがいないくて」

千帆「…え」



コトリ「正直に言うと、本当は…二人の仲を邪魔をしようと思ってました」

千帆「え!？」

店員「!？」

コトリ「焼きもちです、嫉妬です、むしゃくしゃしてやりました」

千帆「う、うずらちゃん…」

塞いでいた気持ちが表に噴き出され、深くため息をつくコトリ

コトリ「でも、意味なかったです」

コトリ「姿を変えただけじゃ、まったくついていちゃいちゃし始めました」

コトリ「むしろなんか、お似合い、なんだなって言うのを見せつけられた感じです」



「コトリ」まあ、その、未永くお幸せに…ということでは、「応」二人のことは認めます」

千帆「ふふふー」 ギョツ

千帆が自分の胸に埋めるように「コトリを抱きしめる」

「コトリ」うわぶっ、な、なんですすかもうっく子ども扱いしないでくださいっ」

千帆「えへへっすらちゃんは私の妹みたいなものだよ？」 ギョーツ

「コトリ」ふふっ」

千帆「ごめんね、寂しい思いさせちゃって…」

「コトリ」……」

千帆「もう一人占めとかしないから、ちゃんと半分こしようねっ」

「コトリ」分かればいいんです、って…半分こ？」

千帆「んー…りっくんをうすらちゃんに、店員さんを…私に！」

「店員」!?」



千帆「冗談、冗談♪」

店員「…ホッ」

コトリ「いい考えでしたけどねぇ」

店員「はあ…勘弁してくれ!」

千帆・コトリ「はははは」

笑い合う千帆とコトリ…もとい、うずら

寂しそうにしていたうずらに付き合っ
ていろいろやつてしまったが
なんとか元の状態に戻る事ができたようだ

これからは千帆とうずら、
どちらとの時間も大切にしたいと思う

千帆「そうだうずらちゃん、晩御飯何がいい?私が作ってあげるよ」
うずら「プレミアムレトルトカレーっ!」

千帆「ええっ!」

二人の笑顔を、一番近くで見ている存在であるために



—それから

すべてを白状した後、何ヶ月も千帆のことをほったらかしにした分の埋め合わせで毎日連れまわされたり、千帆の実家である定食屋の手伝いをしている

毎日のように店に顔を出し、作業を覚えていくうちに

千帆の親父さんからは、跡取りが出来てよかったと歓喜の涙を流される始末

まあ、近所付き合いで昔から良く知っている仲だし、自分も悪い気は全然しない

覚悟を決め、大学を出たら本格的に店を継ぐために修行をする約束をした

一方、うずらはというと…

千帆ともすっかり仲良くなったみたいで

今では二人だけで買い物に出掛けたりもしている

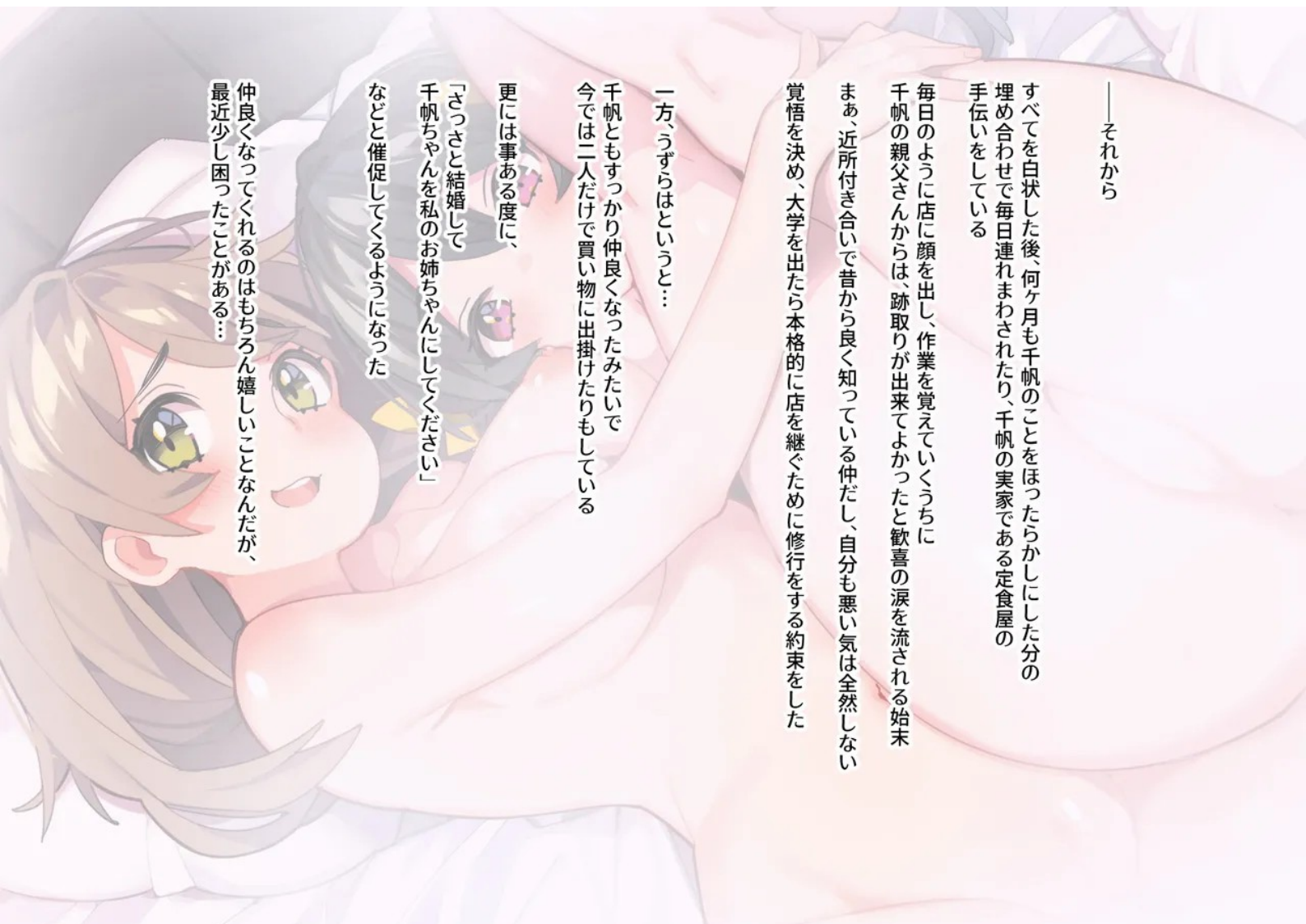
更には事ある度に、

「さっさと結婚して

千帆ちゃんを私のお姉ちゃんにしてください」

などと催促してくるようになった

仲良くなってくれるのはもちろん嬉しいことなんだが、最近少し困ったことがある…





「りっくん♡」
「お兄ちゃん…」

「……」

「は、早く挿入してください、恥ずかしいです」

「ふふ、かわいいー」 ギュッ

「あっ」

「フー、フー…ッ」 キンギン

「ほら、りっくんのおち〇ちんも
かわいいって言ってるわ」

「うっ…」

「！」

ガッッ

「ひゃあんっ」



「ふあああ♡」

「!」

「あ、あ、あ、奥までっ」

千帆に抱えられて持ち上がったうすらの下半身
目掛けて飛びつくように腰を動かす

「んっ、あ、だめっ、もっと…ゆっくり」

ぽんぽん

ぽんぽん

「あっ、あう♡」

「すぐ、にっ、いっ、ちやうからあっ♡」

「ふふ、交代する？」

「な、ま、まだ始まったばかりです！」

「!」ズンッ

「ひゃあああ♡」ピクッ



「あつ…あつ…！」 ビクッ、ビクッ

「う、うずらちゃん？」

「はあ、はあ…」 ビクッ…ビクッ…

「…イっちゃった？」

「…ごめん、なさい、こんな…」

「いいんだよ、悪いのは手加減
出来ないりつくんだからね」 なでなで

「…え」

「うう、千帆ちゃん ギュッ

「りつくん、うずらちゃんは
まだエツ手慣れてないんだから
無茶しちゃだめだよ？」

「…は、は」

「…じゃあ、次、私にも」

「いれて？」



「あんっ♡」

「フンッ、フンッ」

ん

「あぁっんいっ♡
りっくんっ、りっくんっ♡」

力加減の良く分かっている千帆には
遠慮なく腰を強く打ち付ける

「んんっ、気持ちいいっ♡好きいいっ♡
りっくんっ、っ♡大好きいいっ♡」

ん

じゅわっ
じゅわっ

「はぁっ、はっ」

「もっど、突いてっ♡
奥までおち〇ちん来てえ♡」

ん

あの一件から千帆が
昔より喘ぎ声を我慢しなくなったり、
淫語も交えたり、前と比べて大胆に
エッチをするようになった

「フッ、フンッー」

ん

「あああぁっ♡
それ好きいい♡」



「あっくん、はあっ♡」

「千帆ちゃん…」

外にまで響きそうな喘ぎ声で
激しくよがる千帆

「うっ…」 びくびく

ペースが速すぎたのか
自分も臨界点に近い

「りっくん♡ななかあ！
なかがいいっ♡」 びくっ

「！」 ソクッ

自分が千帆の体を
知り尽くしているように、
千帆もまた、こっちが限界なのを
感じ取れているようだ

ぐた

ぱんぱん
ぬちゅ

ぱんぱん
ぐた

「ハア、ハア、」

射精に向かう
激しいピストン

「あっ、あっ、あ、ああっ♡」

「いっぱいでしたっ♡
私の子宮、りっくんのせいで
満タンにしてえ♡」

びくびくっ

びくっ



「くっ！」 きゅぽんっ

しゅぽっ

射精しきる寸前で
千帆の膣内から抜き出し、
その勢いでうずらの中に再び挿入する

「ひんっ♡」

びゅるるんっ

「あっ♡ああっ、お兄ちゃん♡」

ビクッ、ビクッ

残りの力を振り絞り、
うずらの膣内にも精液を流し込む

「ああっ、私の中にもお兄ちゃんの
赤ちゃんの種が…♡」

ビクンッ

「うれっ♡」

びゅん

びゅん

「ハアッ、ハアッ…ッ！」

うずらの狭い膣内が
射精で敏感になった性器を
締め付けるように刺激する

「んぐーうー！」

ドクッ…ドクッ…

びゅん



「ハア…ハア…」

射精が収まり、
性器が引き抜かれた膣から
精液が零れ落ちる…

ぷんぷん

どど

どど

「はあ…はあ…りっくん♡」

「ふー…お兄ちゃん」

「ハア…ハ…」 クラツ…

「！」 ガクン

足に、いや、
全身に力が入らない…

「あれ、りっくん？」

「？」

お互い平等にという結論に従い、
こんな風に毎日二人一緒に絡み合っている

最初こそ自分も全力で二人を相手にできたものの、
連日の3Pセックスは流石に体力の消耗が激しく
性欲は衰えなくとも、肉体の限界が訪れていた

だが、二人まとめて幸せにすると
心に決めたからには決して引き下がらない

そうだ、倒れるわけには…

…ドサツ

うわああっ
りっくんっ
大丈夫っ!?

ち、千帆ちゃんっ
きゅ、救急車ですっ

そ、そっか!
あ、あても
なんて説明したらっ



——暫く気を失った後

目が覚めると、うずらが膝枕をしながら
うちわを仰いでくれていた

すーっと、そよ風に乗って、

台所の方からお腹の減るいい匂いが漂ってくる

どうやら千帆が夕飯の準備をしているようだ

ベシッ

鼻を伸ばし、しまりのない顔をうちわが一喝する

「心配したんですからね」と

眉を蹙め、一瞬不機嫌そうな顔をしていたが、
すぐに和らぎ、再びうちわを仰ぎ始めた

ゆつくりと和やかな時間が流れている…

こんな時間をずっと二人と感じられることを願い、

眠気の残った瞼をゆつくり閉じるのであった



おわり























































































































































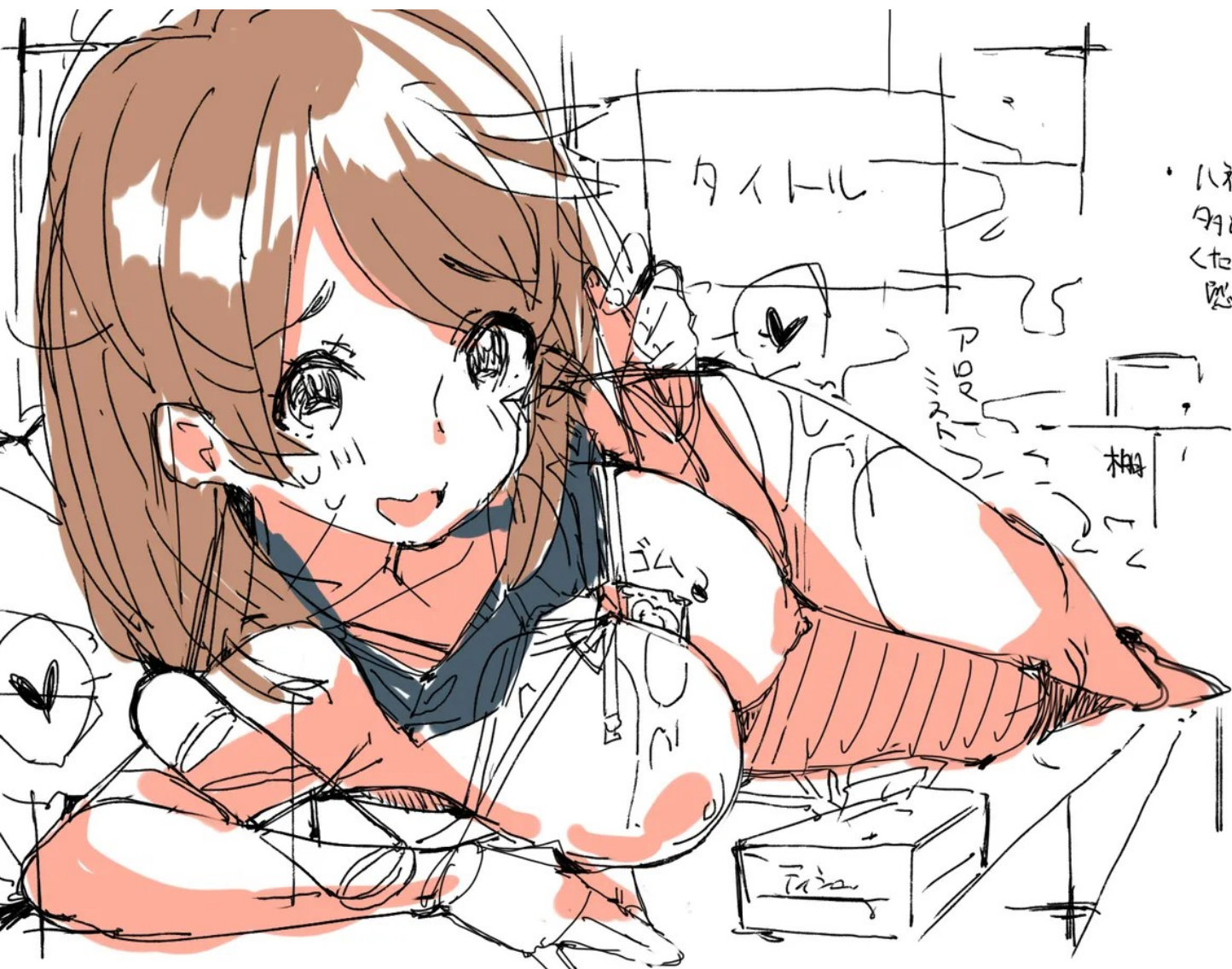












タイトル

- ・ 八重の巻
- ・ 夕焼け
- ・ くらげ
- ・ ぼんぼり
- ・ 燈籠

梅

Tina

